

## 「用なさととづめつ」考：紫式部日記の贈答歌

田村，隆  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8935>

---

出版情報：語文研究. 95, pp.1-13, 2003-05-30. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 「用なさにとゞめつ」考

——紫式部日記の贈答歌——

—

寛弘五年重陽の日、紫式部のもとに道長室の倫子から贈り物が届く。その様子は『紫式部日記』の記事に見える。

九日、菊の綿を、兵部のをもとの持て来て、「これ、殿の上の、とりわきて。」「いとよう老ひの」「ひ捨てたまへ」と、のたまはせつる」とあれば、

菊の露わかゆばかりに袖ふれて花のあるじに千代は  
ゆじゆむ

とて、かへしたてまつらむとする程に、「あなたに帰わたらせたまひぬ」とあれば、用なさにとゞめつ。(注1)

## 田村隆

倫子が届けたのは菊の着せ綿であった。山中裕『平安朝の年中行事』（塙選書、昭和四十七年）によれば、

菊綿は宇多天皇のときから行なわれたもので八日の夕に綿を菊花にかぶせ、その菊の露にぬれた綿で九日朝、肌をなでれば、老を棄てるという風習によって平安貴族、女房の間で広く行なわれた。

とあり、

九月になりて九日綿おほひたる菊を御覧じて、

もろともにおきるし菊の朝露もひとり袂にかかる秋  
かな

という『源氏物語』幻巻の一場面を紹介している。この風習は先行する長編物語『うつほ物語』には一例も見られないらしく、次のようにも述べる。

撰閑時代の女流文学にみられる菊のきせ綿のことは、ここにはまだみられない。このことから考えると、やはり菊のきせ綿は、後述するが、女房社会独特の風習であることが明らかになろう。

ただし氏が、今問題にしている『紫式部日記』の場面を引いて、「式部は感激して、…と歌を送っているほほえましい場面がみられる」と述べるのは正確でない。なぜなら、「菊の露」の歌は送ろうとした矢先、すでに倫子は「あなたに帰わたらせたまひぬ」という知らせが入り、それを聞いた式部は「用なさととゞめ」たのである。日記の記述に拠るかぎり、歌は相手に渡せずじまいであったのだ。

このとき、式部の歌はすでに贈答歌としては不要であったに違いない。だが、現実には歌は記されている。記さない書き方も可能であり、後述するようにむしろ『源氏物語』では不用の和歌を積極的に排した式部が、ここで自らの歌を書き

留めていることは、注意してよい事象である。そもそも『紫式部日記』に式部の歌はわずか十首しかないのにもかかわらず、この歌はあえて残されているのだ。

一例のみならば偶然記しおいたということも考えられるが、実はこの日記には、その六日後の九月十五日にも似たような記事がある。敦成親王生後五日目の産養の夜である。この日はくもりのない十五夜であった。

歌どもあり。「女房、さか月」などあるをり、いかゞはいふべきなど、くちぐ思ひ心みる。

めづらしき光さしそふさか月はもちながらこそ千代もめぐらめ

「四条大納言にさしいでん程、歌をはさる物にて、声づかひ、用意入べし」などさゝめきあらそふ程に、こと多くて、夜いたうふけぬればにや、とりわきてまさくで、まかてたまふ。

ここでも、歌壇に名を馳せていた四条大納言藤原公任に歌を披露することになりそつたとあって、式部ら女房もはりきつて準備するものの、特に歌を求められることはなく、結局期待外れに終わる。

このような出来事は日常的に和歌をやりとりする宮廷社会においてしばしば起こったであろうが、それを記録する文献は管見のかぎりではそう見つからない。それは、不要になつた歌は省略されて現れないからである。先にも触れたが、この二例を見ても歌を除いて文章を仕立てることは可能ではあつた。文章の配列を確かめると、いづれの例も「歌を贈れなかつた」という事情説明に比し、歌が先に来ていることに注意したい。歌が拳がったのちに「その歌は実は……」とつづくのである。歌は、控え目ではあるがたしかに主張されている。さて、これらの「省略されなかつた」歌は一体何を意味するのであるうか。

## 二

倫子との贈答を記す結び「用なさととどめつ」に関して、『紫式部日記全注釈』（萩谷朴氏）は以下のように述べる。

倫子がかさつさと引き揚げてしまったので、紫式部も追いかけてまで喧嘩を買つことの無益さを悟つて、やめたのである。…道長の情を蒙つて、いくぶん気負つたところのある、その頃の紫式部であるから、一時の亢奮に駆ら

れて返歌を添えて着せ綿を返上しようとしたのではあるが、倫子が既に自分の居所へ帰つたと聞いて、たちまち冷静な理性をとりもどしたのである。

倫子と紫式部との心理的小ぜりあいとして解釈がなされている。だが、山本利達氏が「用なさ」の意味内容を詳細に検討する「ようなさととどめつ」（『紫式部日記攷』清文堂、平成四年）において、「これは、道長の正妻の倫子を、一女房の紫式部と同列の人間として扱つという点に難点がある」と批判しているように、ここに対等な贈答を見てはならないであろう。皮肉をこめた倫子の「挑戦的な意図」と式部の「痛烈な竹籠返し」とを見るのは行き過ぎである。話の全体としては、山本氏が「花のあるじ」を中宮彰子でなく道長室倫子を指すと見た上で、この箇所にも「中宮の母倫子の長寿を祈る心を中宮御前で披露され、中宮一族の弥栄を祝おう」という意図」が含まれているのにまずは随いたい。

なお、「とどむ」の語義についても『全注釈』は「行為の中止を意味すると同時に、物品を留め置く意味にも作用している」と述べるが、あとに残す、遺留するという意味では、氏の挙げる『土佐日記』の例、

「童言にては何かはせむ。嬬、翁、手捺しつべし。悪しくもあれ、いかにもあれ、便りあらばやらむ」とて、置かれぬめり。  
(承平五年正月七日)

の「置かれぬ」はともかく、辞書類の用例を検するがぎり、かゝる折にも、あるまじき恥もこそと心づかひして、御子をばとどめ奉りて、忍びてぞ出たまふ。

(『源氏物語』 桐壺)

なほいといはけて強き御心掟のなかりける事、と思ひ乱れ侍に、いましばしの命もとどめまほしうなむ。

(『源氏物語』 夕霧)

などに見られるような「とどむ」が多く、比較的軽い意味での物品を残す意には用いにくいようである。やはりここは、「返すのをやめてしまった」とのみ一義的に解す方が適當である。

さて、歌が省略されていないという、はじめの問題に戻る。『全注釈』の解釈から答を導くならば、この「正面衝突」(萩谷氏)の一部始終を書き留めておく必要から歌が残されている

る、ということになるうか。

すでに提出された説はそれだけではない。ここに記された歌に注目して考察したものに、吉井美祢子「紫式部日記における和歌の場面についての試論」(『むらさき』二十四、昭和六十二年)がある。吉井氏は原田敦子氏の「限りない痛憤と共に、我が身の程も考えずに感激した自身の軽率さへの自嘲がこめられている」<sup>(注)</sup>という発言を受けて、

一つには、その賀歌の受けとめ手の不在を記す地の文のありかたゆえ、また一つには、それがいかに詠まざるをえない状況の下で詠まれたものであるかということを示す地の文のありかたゆえに、賀の歌の持つ意が空洞化されている。そして、他者を意識するからこそ詠まれた賀の歌であるだけに、そこに他者との本質的な意味での交流が断絶している、孤絶した表現主体のありようが浮かび上がってきていた。

と述べる。萩谷氏のいう臨戦的「亢奮」ではなく、「感激」とそれゆえの「後悔」であると解して、その感情の起伏の残滓として歌をとらえようとする説である。だが、あえて後悔を表明するために歌を残すというのも如何であろうか。それ

は水鳥の胸の内を思つて内省する場面のような、この日記の自照的な側面を意識してのことであるが、『紫式部日記』は必ずしもそのような側面ばかりを有するのではない。ここは少なくとも話の筋立上は、素直に華やかな宮廷記録の二コマとして読み取つてよいのではない。

ここで歌が記されている理由の一つは、式部がこれらの歌に自信を持っていたからではなからうか。「菊の露」の歌は『紫式部集』の二二〇番にも収められており、それが『後撰集』秋下に見える祖父藤原雅正の歌、

露だにも名だゝる宿の菊ならば花のあるじや幾世なるらん

を踏まえるともすでに指摘されている。また、後の「めづらしき」の歌も、同じく家集の七七番に入集するし、こちらには『後拾遺集』（巻七賀）、『新撰朗詠集』（巻下雑）、さらには『今鏡』、『古来風躰抄』にも収められるなど、後代の評価は極めて高い。吉井氏も「例えばこれらの歌に式部なりの自負があつて実際には外へ出せなかつたけれどもあえて日記中に書きとどめようとしたのだ、と考えることもとより可能ではあるけれども」とその可能性を示唆しているように、他の女房に「物語このみ、よしめき、歌がちに、人を人とも思は

ず」と評されたと自ら記す式部のこと、歌に自信のほどはあつたに違いない。『全注釈』も「めづらしき」の歌を評価して、『紫式部』としては会心の作であつたと思われる」と述べる。

しかし、ここで歌を省略せずに載せるということは、『紫式部日記』という作品内であつたからこそ可能だつたのだと思われる。自信があつたので記した、という世界は「日記」ならではの世界であつた。

そして、その問題にかかわる本質的理由が、歌への自信と  
いう事のほかに、もう一つあると思われるのである。

### 三

『源氏物語』幻卷。この巻は早く小町谷照彦「幻」の方法についての試論——和歌による作品論へのアプローチ」（『源氏物語』の歌ことば表現 東京大学出版会、昭和五十九年）らによつて指摘されるように、これまでの光源氏の人生を歌によつて総括するという特異な舞台であつた。その舞台にふさわしく、源氏と女君を中心に様々な歌が詠まれつつ、春夏秋冬の時間が進行するが、そこで詠まれた歌がすべて記録されるわけでは決してなかつた。

女房など多く言ひ集めたれど、とゞめつ。

人々多くよみをきたれど、漏らしつ。

『万水一露』も「例の紫式部が筆法也」としてその省筆を指摘する。はじめの例は、亡き紫上を偲んでの源氏と夕霧の贈答について。

亡き人をしのぶるよひのむら雨にぬれてや来つる山

ほととぎす

とて、いとゞ空をながめ給ふ。大将

ほととぎす君につてなんふるさとの花たち花はいま

ぞ盛りと

女房など多く言ひ集めたれど、とゞめつ。

という、文脈である。省筆について「新大系」の脚注は、「主語は書き手（語り手）で、現場に居合わせているという物語上の趣向」とするが、ここではおそらく主たる目的は「居合わせている」というそこにはあるまい。<sup>注3</sup>源氏と夕霧の二者の歌のみをクローズアップさせるために、他の非主要人物の歌は捨ててしまったのである。紫上への鎮魂の切実さが、

歌の数に比例するものでないという立場を、作者ははっきりととっている。

また後の例は、

まことや、導師のさか月のついでに、

春までの命も知らず雪のうちに色づく梅をけふかざ

してん

御返、

千世の春みるべき花といのりをきてわが身ぞ雪とと

もにふりぬる

人々多くよみをきたれど、漏らしつ。

春までの命があるかわからないと嘆ずる源氏に対し、千年の春を見る花であれかしと導師が梅に託す、という贈答である。またこの場面では、「まことや、導師のさか月のついでに」として、「忘れて思出たる」<sup>注4</sup>『紹巴抄』という立場をとる。藤井高尚の「ものをふと思ひ出で、いふことろばへにて」（『消息文例』）の説明の如く、やや記憶が薄れかけていたことを示す謂いである。幻巻には以上の二例の省筆があるが、珍しく共に歌の省略であることも、<sup>注4</sup>おのづからこの巻の性格を示唆していよう。

そしてこの手法は、

つくまえのそこひもしらぬみくりをは浅き筋にやおもひ  
なすらん

そのほどのことどもおほかりけれど、書かず。

(『一条撰政御集』六五)

君しあれば紅葉のかげもたのまねどいたくなふきそこが  
らしの風

いとあまたあれど、かかればとどめつ。

(『小大君集』九)<sup>(注5)</sup>

もしくは、『大和物語』の、

こと人々のおほかれど、よからぬは忘れにけり。

(二十九段)

その返し、それよりまへまへも、歌はいとおほかりけれ  
ど、え聞かず。<sup>(注6)</sup>

(百二十四段)

などに見られる、私家集から生成したと思われる歌語り的な  
省筆の延長線上にあったのである。すなわち、物語という枠  
組みの中では、森岡常夫氏が「殊に主要人物の和歌以外は、  
記録しても物語の上からは、意味のないことであるに相違な

い」(『源氏物語の省筆』、『源氏物語の研究』清水弘文堂書房、  
昭和四十二年)と述べるような性格を持っていたのである。<sup>(注7)</sup>

#### 四

実は、倫子あるいは四条大納言に宛てて紫式部が詠んだ歌  
は、本来まさにこの「女房など」が「多く言ひ集めた」うち  
のほんの一首に過ぎなかったのである。ましてやそれらは、  
どちらも相手に届くことなく、「用なさととどめ」ざるを得  
なかつた歌であつた。最大で実に三十八首もの歌を列挙する  
『つほ物語』とは異なり、『源氏物語』では歌の羅列は厳格  
に避けられていた。その規範を日記には持ち込むことなく、  
むしろ積極的に書き留めたのである。これは式部にとって歌  
が自信作であつたということもあるが、それ以上に、歌を  
記載することによって、実際は成立することのなかつた歌の  
贈答を仮構として組み立てる。そして日記という形式の中に  
位置づける——すなわち歌と、事の顛末とを記すことで日記  
中での交信を可能にすることこそ、ここに歌がある真の意味  
ではあるまいか。そして、『幻巻』と『紫式部日記』との意識の  
差は、物語で省略されるものと日記で省略されるものがちよ  
うど表裏をなしている実例とも言えるのではないか。その意



味において、『紫式部日記』の二例は、物語に對をなす好例として確認しておきたい。

この事實は、『紫式部日記』の記事とそれを転用する形で成ったといわれる『栄花物語』卷八「はつはな」とを比較することの一層明瞭となる。安藤為章は『紫家七論』に「栄華は赤染や紫より後の人の、古記をとりあつめて、その間に詞を加へて全書となしたるものとみゆ。初花の巻はやがて紫日記をとりて仕立てたり」と記すが、「その間に詞を加へて」という行為は「全書とな」すための単なる接続詞的な役割に留まつたのであろうか。

問題の重陽の場面について『栄花物語』にはただ、

かかる程に九月にもなりぬ。長月の九日も昨日暮れて

千代をこめたる籬の菊ども、行末遙に頼しき気色なるに、とあるのみで、贈答の記事は現れない。ここでは逆に詞が削られているが、そこにも物語作者の意図を考えておくべきであらう。

一方の五夜の場面ではさらに興味深い対照が見られる。

「詞を加へ」た実例。二つの場面の『紫式部日記』と『栄花物語』とを並べて掲げてみよう。<sup>(註)</sup>

(i)

上達部、座を立ちて、御橋の上にまいいり給ふ。殿をはじめたてまつりて攤うちたまふ。かみのあらそひ、いとまसानし。歌どもあり。「女房、さか月」などある折、いかゞはいふべきなど、くちぐ思ひ心みる。

(『紫式部日記』)

上達部ども殿をはじめ奉りて、攤うち給ふに、紙の程の論聞きにくらうがはし。歌などあり。されど、物騒しさに紛れたる、尋ぬれどしどけなう、事繁ければ、え書き、続け侍らぬ。「女房盃」などある程に、如何はなど思ひやすらはる。

(『栄花物語』)

これまで見てきた、四条大納言への歌を準備する場面である。歌の直前までの記事を挙げている。「ここで、『紫式部日記』にはない「え書き続け侍らぬ」という省筆が、『栄花物語』に見られるのが確認される。

『紫式部日記』は伝本にめぐまれず、比較的善本とされる黒川本・松平文庫本でさえも近世期の写本に過ぎない。その事情から、『紫式部日記絵巻』あるいは『栄花物語』の本文は、原態を再建する上での有力な手がかりとなってきた。

『栄花物語』にのみ見えるこの省筆は、『紫式部日記』固有のものであったのだろうか。

現行の諸注釈は概ね『栄花物語』の加筆という立場をとる。今小路覚瑞氏は、

この項の前後に当る日記の記事は極めて簡潔で、「歌どもあり」とあって、その時の歌についてのくわしき叙述はない。栄華物語の作者はその素材になきまゝにこれに對しての弁明的の詞として添えたのではないだろうか。

と推測する。ただし、氏自身も

栄華物語の作者の日記収用に対する方針は、すなわち日記筆者の個人的叙述事項のものを除外し、精密細微にわたる点を忌避するところにあつたと言ひ得るのである。

と述べて、「個人的」「二方的」な筆録の『紫式部日記』と「客観的な第三者の立場」で描く『栄花物語』の性格を定義するよつに、一体に『栄花物語』の叙述は『紫式部日記』の内容を簡略化する向きがあり、「素材にな」いことをここで「弁明」しているとは解釈しにくいのではなからうか。

また近時では、この『栄花物語』の姿勢について、永谷聡氏は、

このような書き換え部分を考えると、『日記』にはない「それどもさわかしきに……えぞ書きつづけはべらぬ」という箇所は、『栄花』の操作であつて、やはり『日記』での「主家に仕えている者」という主体（紫式部）を隠蔽する意図があつたと思われる。ここでは式部の歌を引用せねばならない必然性が生じたのであろう。この場では和歌は多く詠まれたが、いざ式部個人の歌を引用するのは、実際に詠まれたものでないがゆえに違和感を覚えたのである。<sup>(注5)</sup>

として「主体を隠蔽する意図」を指摘し、また中村康夫氏は、「女房、盃」のところで、紫式部の和歌が示される。そこから日記にも記事があるので、『栄花物語』作者は上達部達の歌について書かないことを断るうとしたと理解される。省筆には、同じ事を書かないということ、作品に簡潔性を保証すると同時に、恒例の行事であれば、読者の知識を動員して、読む側の想像力による、作品世

界への主体的参加を実現している一面がありそうである。<sup>(注1)</sup>

と述べて、読者を意識した「作者の主体的な言辞」と見る。日記をさらに読み進めると、歌の贈答ではないものの、このような対照がもう三組探し出せる。少々紙幅を費やすが、続けて掲げる。

(ii)

御湯殿は酉の時とか。

(『紫式部日記』)

御湯殿、酉の時とぞある。その儀式有様は、え言ひ続けず。

(『栄花物語』)

(iii)

たひらかにせさせ給て、後の事まだしき程、さばかり広き母屋、南の廂、高欄の程まで、立ちこみたる僧も俗も、今一よりとよみて、額をつく。

(『紫式部日記』)

いたく騒ぎて、平かにせさせ給つ。そこら広き殿の内なる僧俗、上下、今一つの御事のまだしきに、額づきたる程、はた思ひやるべし。

(『栄花物語』)

(iv)

御輿には、宮の宣旨乗る。糸毛の御車に殿の上・少輔の乳母、若宮抱きたてまつりて乗る。

(『紫式部日記』)

御輿には、宣旨君乗り給。糸毛の御車には、殿の上・少將の乳母、若宮抱き奉りて乗る。つぎぐの事もあれど、うるさければ書かずなりぬ。

(『栄花物語』)

ここでもやはり、『栄花物語』にのみ省筆が見られるのである。

## 五

結論から言えば、私はこれらはいかにも物語らしさをねらった取り繕いではあるまいかと考える。特に歌に関わる(i)の例においてそれは顕著であろう。

先に確認したことは、『紫式部日記』においては何が省かれるかという選定基準が『源氏物語』とは全く逆であるということであった。そして、それは『源氏物語』のみにとどまらず、物語一般にも拡大できる事実であると思う。無論『栄花物語』も例外ではない。物語においては概して省略さ

れるはずの女房の歌が、『紫式部日記』にはかくも堂々と載せられている。

となると、日記に見られる記事をそのまま物語に転用することは、『栄花物語』の作者にとつて甚だ都合の悪いことであつたに違いない。その意味で、四条大納言のくだりで『栄花物語』が「されど物騒がしさに紛れたる、尋ねれどしどけなう、事繁ければ、え書き続け侍らぬ」なる省筆の辞を述べるのは、それに対する処置として物語用に仕立て上げた取り繕いにかけてならない。中村氏の言う「主体的な言辞」の「主体性」とはその意味において發揮された。「詞を加へ」ることで初めて、諸々の不要な歌は除いたという物語的ポーズを取る事が可能になるのである（この場面、物語においてはさらに『公任集』二四二番所収の公任の歌「秋の月影のどけくもみゆるかなこや長きよの契りなるらむ」をこそ高貴の歌として書き留めるべきであつたのかもしれない）。

事実、この日の『大日本史料』に就いてみるに、『日本紀略』には、

九月十五日、壬申、皇子降誕之後五夜也、公卿以下詠  
和歌<sup>ヲ</sup>、令<sup>ニ</sup>參議左大弁行成卿<sup>ヲ</sup>作<sup>レ</sup>序<sup>ヲ</sup>、

の記事が見え、また『御産部類記』には、

諸卿起座<sup>シ</sup>、更<sup>ニ</sup>着<sup>ス</sup>渡殿ノ座<sup>ニ</sup>、召<sup>ス</sup>衝重<sup>ヲ</sup>、一両巡<sup>シ</sup>後有<sup>リ</sup>  
和歌合<sup>ニ</sup>者<sup>ト</sup>、右衛門督公任、其後有<sup>リ</sup>擲采之戲<sup>ト</sup>、

(小右記)

坏酌被巡之後、上卿着<sup>ス</sup>渡殿ノ座<sup>ニ</sup>、儲<sup>ク</sup>突重ノ物<sup>ヲ</sup>、左衛  
門督公任卿執<sup>リ</sup>盃<sup>ヲ</sup>、献<sup>ス</sup>和歌<sup>ヲ</sup>、召<sup>シ</sup>紙筆<sup>ヲ</sup>、賜<sup>テ</sup>左大弁  
行成卿<sup>ニ</sup>書<sup>レ</sup>カシム<sup>ヲ</sup>、公卿一々読<sup>ス</sup>、次<sup>テ</sup>碁手帑<sup>ヲ</sup>、殿上人・  
諸大夫同<sup>シ</sup>有<sup>リ</sup>碁手<sup>ト</sup>、此間盃觴屢勸<sup>ム</sup>、朗詠問<sup>ニ</sup>発<sup>ス</sup>、

(不知記)

とある如く、あくまで公的な記録としては公任達の挙措こそが重要であつたのだ。

だが、いずれにせよ、紫式部の歌ははっきりと記録された。これはこの日記が「中宮職などの事務的な記録」（清水好子氏）や種々の物語とは異なる立場に立っていることを示唆する。「何を残して何を略すか」という選択基準を「上の品」の物語たる『源氏物語』の世界とは別に矜持したということだ。ここに、紫式部の意志がかいま見られる。そしてこの設定された基準は、『紫式部日記』に指摘される「作者の鋭く

強靱な観察力とまた世俗的な栄華の世界に融和しきれない憂愁に満ちた内省的精神」（『日本古典文学大辞典』）、すなわち公・私二者の眼差しの並立という特異な側面を支える要素に成り得たであろう。自らの歌を記すその記述態度は、山本氏の言う「中宮賛美という大主題」に参画するための鍵であったと同時に、たとえ道長家の栄華を書き記す実録の場面においてさえ、省筆というレトリックのレベルにおいて、水鳥の記事に発露されたような日記の私性と繋がっている事実を指し示すものであったのだ。<sup>(注1)</sup> 式部の歌はそれゆえに、省かれてはならなかった。

注

注1 「新日本古典文学大系」による。

注2 「紫式部日記における歌の場面について」、『同志社国文学』昭和四十七年十月。

注3 いわゆる草子地論や「語り」の論からすれば、作者・筆録者・語る女房の三者が関心事となるが、その三者の距離を測ることのみに執着するのは必ずしも適当でない。ここでは、誰の歌が記され誰の歌が記されなかったかという点に焦点を絞るべきである。

注4 『源氏物語』に見られる省筆は、散文の叙述において「くだくだし」として退けるタイプが多い。これは、『落窪物語』等か

ら連なるいわば「作り物語的省筆」ともいってべき叙法である。『源氏物語』中に四十例あまり散見される。対して歌の列挙を避ける「歌語的省筆」は二十例ほど。その比率は作品によって異なるが、この問題については省筆の生成の観点から別稿にまとめる予定であるのでそれに譲る。

注5

『新編国歌大観』による。

注6

野村精一氏は幻巻の文体に注目し、「以上一周忌法要の散文は、これがすべてである。いったい行事の「くだくしい」事は描写しないこの作者にしても、一語の草子地もなく、これですますということは、それ自体反散文の機能において、この散文を書いていることにほかならぬ」として「全く私家集の一節かと思えるような文章の形式」と述べる（『源氏物語の文体批評』、『源氏物語文体論序説』有精堂、昭和四十五年）。たしかに、実際に「詠まれた」と歌を主観によって「もらした」とするのは、勅撰集でないという意味においてもまさに私家集的ではないかと思われる。

注7

森岡氏の説は必ずしも「物語 全般にわたって認められるわけではない（例えば「うつほ物語」など）が、『源氏物語』には氏の述べる傾向が色濃く現れている。

注8

『紫式部日記』と『栄花物語』との対照については、今小路寛瑞『紫式部日記の研究（新訂版）』（有精堂選書、昭和四十五年）に一覧を掲げる。また、白井たつ子『紫式部日記』と『栄花物語』「はつはな」の比較の問題」（『日本文学研究資料叢書 歴史物語』有精堂、昭和四十六年）においても両書の比較が試みられ、「とにかくこの箇所、その歌までを『紫式部日記』から引き写し、『栄花物語』に使用する必要があったかどうかということについては、疑問が感じられてな

らない」とした上で、その理由を「抑々、『宋花物語』の作者が、『紫式部日記』の記述に大きく凭掛り、採用すべき記述の選択を、厳しく行わなかったためではないかと思う」と推測する。

注9

永谷聡「『紫式部日記』産養記録の性格——「観察者」・「執筆者」としての紫式部と『宋花物語』（初花巻）との関わり——」『帝京国文学』九、平成十四年九月。

注10

『宋花物語』は何を書こうとしたか『宋花物語の基層』風間書房、平成十四年一〇月。

注11

日記の私性を強調する論考として、古くは池田亀鑑『宮廷女流日記文学』の「紫式部日記は、他の何物の手段のためにも書かれたものではなく、全く式部の魂それ自らの教養の記録に外ならない」の言があり、また篠原昭二「紫式部日記の成立——記録の方法について——」（『国文学』昭和四十四年、五月）では、「紫日記が公的な記録係の目によってではなく、晴儀の外に身を置いた者によって記されていることが明らかである。つまり、公式な記録では全くなく、第三者的な見聞記である」と述べる。

（たむら たかし・本学大学院博士後期課程）